

2021年度

次世代文明センターシンポジウム

「専門知と教養知を考える — 汎用的スキルを基軸に —」

2022年3月1日（火）

「教養」から「技能」へ
～スキル化された教養知の行方～

江口 建

豊田工業大学

人文科学研究室（哲学／教養教育）

公開用 改訂版

本日の発表を通じて 考えてみたいこと

- ① **教養教育**は、何をすべきであり、何ができるのか。
- ② **教養教育**は、専門から独立している（できる）のか。
- ③ **教養教育**は、それでもやはり必要なのか。

【道筋】 「教養」概念の確認と検討／歴史的背景

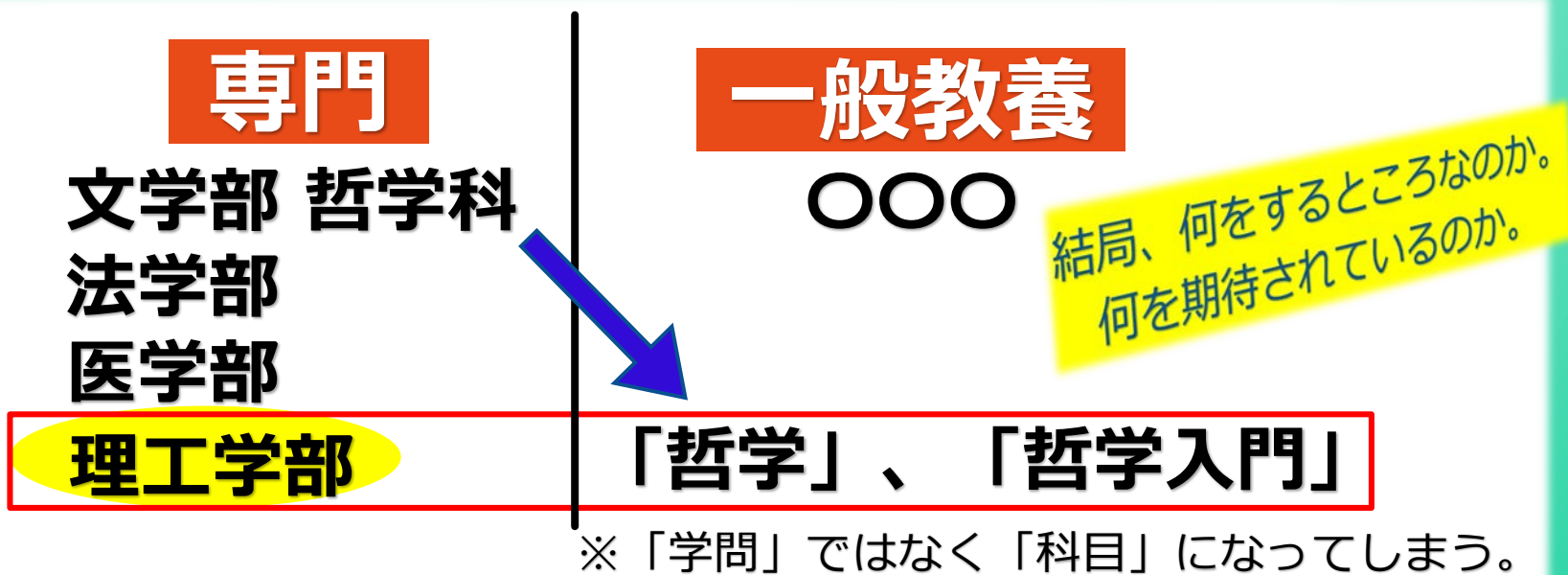
「教養教育」の考え方の歴史／輸入経緯

「新しい教養／21世紀型スキル」と呼ばれるものの検討

「専門」と「教養」のおかしな関係

「専門」としての哲学と「教養」としての哲学？

そんな区別はあるのか？



- ◎一通り「広く浅く」身につけさせるのが教養教育？ **深さ** ↔ **広さ**
- ◎理工系にとっては、**人文・社会系の知識**が教養？ **理系** ↔ **文系**

教養教育の
捉えどころの
なさ

呼び名の多様性

教養教育

一般教育

共通教育

基礎教育

基盤教育／基幹教育

リベラル・アーツ

それに応じて、科目群の名称も・・・

教養科目、一般教育科目、基礎科目、総合科目、総合基礎科目、
共通科目、共通基礎科目、リベラル・アーツ etc.

「教養教育」の翻訳のしづらさ

- liberal arts ← 中世ヨーロッパの自由七科に由来。古典重視。西欧では、Gymnasium (独)、lycée (仏)、public school (英) などで。
- liberal education ← 17世紀アメリカの大学カレッジで開始。
- general education ← 19世紀後半、専門教育 (Specialized Education) が登場し、それとの対比で登場。とりわけ戦後アメリカ (民主主義の文脈で)。
- basic education
- general basic education
- core curriculum / common core
- ↑ コア・カリキュラム / 共通基礎教養

それぞれの単語には、歴史的なコノテーションがあるため、どのように訳すかで、欧米人への伝わり方が異なる。

「教養教育」の3つの含意

① 人格形成・人間性の陶冶 (Bildung)

② リベラル・アーツ (liberal arts/artes liberales)

※自由七科 (文法学・修辞学・論理学・算術・幾何学・天文学・音楽)

→ 人文・社会・自然科学のバランスよい科目配置

③ 初年次教育 (アカデミック・スキルズ/スタディ・スキルズ/ソーシャル・スキルズ)

※ノートの取り方、レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方、手紙・メールの書き方、資料検索の仕方、図書館の活用法、情報倫理、時間管理、キャリア科目

そこに加えて、「教養教育」と呼ばれているものの類似物・・・

- ・ 導入教育 (スタートアップ・セミナー、フレッシュマン・セミナー)
- ・ キャリア教育 (職業教育)
- ・ リメディアル教育 (補習教育)

要するに、「専門科目」に入らないものを、まとめて「教養教育」と呼んできた歴史がある。

教養教育の目的が
あいまい！

文科省「高等教育の一層の改善について」（答申）
平成9年（1997年）12月18日 大学審

「現在，多くの大学等で，（…）カリキュラム改革が進められている。しかしながら，その過程で，**教養教育が軽視されているのではないか**との危惧があるほか，**教養教育を行う目的が不明確なまま，単に専門教育の入門的な授業を行うことを教養教育と呼んでいるのではないか**との指摘もある」

「教養」概念の輪郭／歴史的背景

明治～大正

教養

修養

修身

明治期を通じて、「教育」とほぼ同義に使われていた。

むしろ、こっちが、今で言う「教養 (Bildung)」だった。

※ それまで使われていた「**修養**」という言葉から「**教養**」という言葉が最初に生み出したのは**和辻哲郎**だと言われている。 cf. 筒井 (2009) pp.101

教養 = **culture** (英/仏) = 自己の人間性の開墾、精神の成長
Bildung (独) = 人格形成
humanitas (ラ) = 人間性
paideia (ギリ) = 子どもを導くこと
 > (英) **pedagogy**

ドイツ語の「教養」概念 = **Bildung** (自己形成・人格陶冶)

英語の「教養」概念 = **culture** (文化・開化・開墾)

 教養人 = 文化人

▶ ドイツ語では「教養」と「文化」は別の単語で表す。

教養 = **Bildung** (自己形成) . . . 建築のイメージ (建造物を建てる)

文化 = **Kultur** (開墾・耕作) . . . 農業のイメージ (作物を収穫する)

▶ **Bildung**には「教育」の意味もあって、大学での教育は**Bildung**と呼び、高校までの義務教育のようなものは**Erziehung**と呼ばれる。

Bildung = 大学教育 (人間形成)

Erziehung = 小中高の教育 (しつけ・訓練) < ziehen (引っ張る)

※ 英語では「教養」も「文化」も**culture**の一語で表す。また、「大学教育」も「初等・中等教育」も同じ**education**という単語で表す。

※ **education** < **educate** (引っ張り出す)

「教養」概念のはじまり(西洋)

= 「いかに生きるか」 という問いと結び付いていた。



この問いが庶民レベルで実質的に可能になったのは

12世紀頃

(都市の成立、職業選択 [ギルド]、大学進学 etc.)

※それまでは・・・農村出身の子は農民。
父親の職業を継ぐのが当然。

cf. 阿部 (1997年) pp.52

かつての「教養」概念

近代的教養 = **古典的知識**の体系

とりわけ

ルネッサンス期以後の近代において大学の
「教養」を基礎づけてきたのは

人文知 (Humanities)

フマニタス (humanitas) ……ラテン語

かつての教養概念の中心には
「文字」や**「書物」**があった！

教養主義

人文的教養 → 文学部が主導 → 文学的素養

「文字」と「書物」に特化

なかでも日本のドイツ文学者や旧制高校のドイツ語教師……
ナチズムやナチス文学に親近感・シンパシー

教養市民層 = 高学歴者 = 知的エリート = 高等遊民
たちが行き着いた先

「教養ある俗物」 (三木清)
cf. 参考資料集

cf. 高田 (2001)

日本学会「提言：21世紀の教養と教養教育」

(日本の展望委員会／知の創造分科会) 平成22年(2010年)4月5日

p.6

「**人間性や文化的な知識・素養と品位**を指し、もう一方で、その人間性や文化的素養・品位を『**教え養うこと=教育**』を指す(…)」

p.6~7

「第一に、**教養は人間性や知的・文化的な豊かさ(素養・品位)に関わる概念**であり、第二に、**教育や豊かな文化的経験を通じて育まれる**ものであり、そして第三に、歴史的には、**身分制・貴族制社会を含む階級社会(的遺制)を基盤にして、エリートの象徴的・要件的素養(エリート性)を含意する**ものとして形成され観念されてきたようだということである」

p.7

「特に19世紀後半以降の**産業社会と市民社会の進展**を背景にして、**近代的な産業社会・市民社会(政治社会)に参入し、そこで成功するにふさわしい知的・文化的素養や倫理・規範を身につけている**こととして観念され評価されるようになった。言い換えれば、**教養は、エリート性を維持しつつ、「近代=産業=市民社会」において成功するための重要なパスポート**として機能してきた。そして、この間、その理念と機能は、**「教養主義」(エリート性を具備した「教養」を重視し志向するカルチャー)**によって維持され展開してきた」

教養教育の近代史

アメリカの事例

【アメリカの大学】

学士課程教育は、基本的には**リベラル・アーツ教育（教養教育）**として実施されてきた。

17世紀……liberal education

= エリート主義、階級意識

19世紀後半～20世紀初頭……general education

= 大衆化、民主社会

↑

専門教育（Specialized Education）
との対比で登場。

教養教育の近代史

戦後アメリカ

- ▶ **コロンビア大学**・・・「コロンビア・カレッジ」での一般教育 (general education)
(全学共通：かつての日本の国立大学の教養部に相当)
- ▶ **ハーバード大学**・・・「ハーバード・カレッジ」での一般教育 (全学共通)



※学長コナントによる1945年の改革

1945年「自由社会における一般教育 (General Education in a Free Society) 」



戦後日本の新制大学の一般教育のモデル

1970年代 ハーバード大学のコア・カリキュラム

※ベトナム反戦運動や公民権運動の世相を反映

他、**ブルーム** (保守派) ←アメリカ型教養教育の典型として日本に紹介

『**アメリカン・マインドの終焉：文化と教育の危機**』 (みすず書房)

※大衆民主主義／大学の 대중化は、アメリカの大学の伝統的特徴である liberal education を危機にさらすと警告。

粗雑にまとめると、アメリカの大学で発展した一般教育／教養教育は、西欧原理主義への憧憬と回帰を内在しつつも、そこから**戦後民主主義の浸透、市民性の涵養、異なる民族間の多文化共生の実現**へと歩もうとしたもの。

教養教育の受容史／輸入経緯

【日本の大学】

1. 明治教養（修養）主義（1910年前後～）

※新渡戸稲造、夏目漱石、ケーベル、加藤咄堂『修養論』（明43）、西田幾多郎『善の研究』（明44）

2. 大正教養主義（1912年～）

……旧帝国大学と旧制高校の知的階級、エリート学生のあいだで成立した文化（漱石、ケーベル門下）

※阿部次郎『三太郎の日記』（大正3）、倉田百三『出家とその弟子』（大正6）、『愛と認識との出発』（大正10）、西田幾多郎『自覚に於ける直観と反省』（大正6）、和辻哲郎『古寺巡礼』（大正8）

3. 昭和教養主義（1930年代）

※河合栄治郎『学生叢書』（昭11）、『学生に与う』（昭15）、和辻哲郎『風土』（昭10）

↑ 教養主義のバイブル

三木清
cf. 参考資料集

4. 新制大学発足（1949年／昭和24年）……戦後の学制改革

現在「教養教育」と言われているものは、このときに「一般教養科目」として導入されたもの。
(人文・社会・自然の3系列)

特徴・・・民主主義の成熟化、民主的市民（良き市民／good citizen）の育成



しかし 「批判的思考教育の目的の一つは、良き市民を育てること」 cf. 楠見（2013）p.7

明治以来の専門教育・職業教育を重視するドイツ型の大学制度はそのままに、形だけアメリカ型のリベラルアーツ・カレッジのやり方を導入しようとしたため、一般教育の理念や意義が十分に浸透しなかった。cf. 教養教育研究会（2002）pp.3

そうすると、問題は……

**専門教育と教養教育の関係は
どうなっているのか。**

**教養教育は
専門教育の下請け／下働き？
学科横断の共通科目？
専門の導入教育？**

1970年代後半～ 〈知〉の「地殻変動」

教養の崩壊

教養の失墜

教養主義の没落

〈知〉の「大衆化」

〈知〉の「大空位時代」

大きな転換

1991年 大学設置基準の大綱化

一般教育と専門教育の科目区分および履修単位数の規定の廃止

→教養学部または教養部の解体

→専門教育重視（ディシプリン重視）の傾向

→大学院重点化と研究重点大学化の政策

教養教育に関しては・・・

→それぞれに適した教養教育の中身を、各大学の各学部ごとに考えて実装せよ。

※東大「教養学部」の「カリキュラム大改革」

いわば、理念だけ通達して、実装の仕方を各大学に丸投げした形。

それぞれの大学において、授業科目の枠組みにこだわることなく、この理念・目標の実現のための真剣な努力・工夫がなされることを期待するとともに、この点についての大学人の見識を信ずる。

大学審「大学教育の改善について（答申）」（平成3年2月8日）

平成22年（2010年）4月
日本学術会議（日本の展望委員会／知の創造分科会）

提言「21世紀の教養と教養教育」

グローバルな経済競争・金融危機
地球環境・生態系の破壊
地域紛争・テロ
差別・貧困

価値と倫理の再編・再構築



「市民社会の課題と市民的教養の形成」

審議会答申に見られる変遷

◎吉田（2013） p.270～283 によれば・・・

一般教育の目標

- ▶ 第Ⅰ期（1946～1959）民主化の担い手としての「市民」の育成
- ▶ 第Ⅱ期（1960～1975）複雑高度化する社会を生き抜く「社会人」の育成
※高度経済成長期、第二次ベビーブーム
- ▶ 第Ⅲ期（1976～1990）理解力・分析力・思考力などの「能力」の涵養
- ▶ 第Ⅳ期（1991～2013）課題探究能力／準備教育・リメディアル教育・初年次教育
出版時点

「市民性」や「社会人」としての価値観の涵養から

「能力」の開発へ！ → 教養のスキル化

これはつまり、それまで定量的に測定できなかった「教養／人格／人間としての成熟度」なるものを、数値化できるものに置き換えるということ。つまり、教養教育で培うものを、**定量化・数値化可能な「学力」と類比的に扱う**ということ。

→ 達成度評価とカリキュラム設計

p.11

「近年の答申等の指摘や論調は、戦後間もなくの教養教育をめぐる議論とは異なるニュアンスを次第に強めてきている。その変化は、教養教育の究極の目標として想定されていた「民主的社会」とその豊かな展開を担う「民主的市民の形成」という観点が後景に退き、より実践的・実用的な観点が重視され、教養の中身を構成する知識や能力が重視される、といったものである。後者は、最近の「学士力」「社会人基礎力」や「汎用的スキル (generic skills)」などの概念・考え方に端的に表れている。」

汎用的スキルへ！

経団連の声明

▶一般社団法人 日本経済団体連合会「国立大学改革に関する考え方」（2015年）

「かねてより経団連は、数次にわたる提言において、理系・文系を問わず、**基礎的な体力、公德心に加え、幅広い教養、課題発見・解決力、外国語によるコミュニケーション能力、自らの考えや意見を論理的に発信する力**などは欠くことができないと訴えている。」

▶一般社団法人 日本経済団体連合会「今後の教育改革に関する基本的考え方—第3期教育振興基本計画の策定に向けて—」（2016年）

これからの時代の人材に求められる素質、能力として・・・

「**自らの問題意識に基づき、課題を設定し、他者に正解を求めず、主体的に解を見出す能力、自らの意見を論理的に発信する力、外国語によるコミュニケーション能力、幅広い教養（リベラル・アーツ）、多様性を尊重し、社会や文化的の背景の異なる人々と協働して事業を遂行する能力**」

「理工系であっても人文社会科学を含む幅広い分野の科目を学ぶことや、人文社会科学系であっても**先端技術や理数系の基礎的知識を学ぶこと**」

「質の高い情報を取捨選択し、**情報を課題解決のために使いこなす能力**（情報活用能力）」

他方で……

何（誰）のための能力開発か

cf. 日比（2019）p.4 より

- 企業で働く人材に求められるものを、大学が肩代わりしているだけなのでは？ 人間を育てるのではなく、企業向けの人材開発をしているだけなのでは？
- 他方で、大学教育は、企業の人材開発とは本当に完全に違うのだろうか？ 大学が能力開発に注力することと、大学教育が企業の価値体系に飲み込まれてしまうことは別のことではないか？
- 論理性やコミュニケーション能力は、明らかに、企業人であっても研究者であっても（さらに言えば、市民一般にとって）必要であるはず。「大学と企業は違う」と反射的に批判するのは短絡的。

能力開発に注力することの呪縛

大学の使命とは？
※ J・S・ミル cf. 参考資料集

教育の主眼が「能力開発」にシフトすると…

▼吉田（2013）によれば・・・

その教育は**教養課程でも専門課程でも、どちらでもできてしまう**。そうなれば、**教養部の存在意義の低下、教養教育カリキュラムの軽視につながる**。

▼日比（2019年）pp.3 より

「何が**教養のコア**で、**教養教育と専門教育**で、**どう分担するのか**、**そもそも分担するものなのか**、ということが議論の課題として出てくると思います」

ただし・・・

「能力の増進を**教養教育として行うのか、専門教育で行うのか**は**本質的なことではない**と思います。大学の組織を先に考えると、どの部局でやるのが問題になってくるのですが、**最終的に4年間トータルでどれだけ力がついたか**ということが**アウトプットとして大事**だと思います。どこで何をやるのかということは、身につける能力を分解して考えること自体の難しさや、評価の難しさもあります」 cf. 日比（2019年）p.4

これについて、文科省はどう言っているか。

【大学教育の改善について（答申）】（平成3年2月8日 大学審）

- 一般教育の理念・目標は、大学の教育が専門的な知識の修得だけにとどまることのないように、学生に学問を通じ、広い知識を身に付けさせるとともに、ものを見る目や自主的・総合的に考える力を養うことにあり、入学してくる学生や諸科学の発展の現状から見て、このような理念・目標を実現することが一層必要。
- **一般教育と専門教育との有機的関連性**に配慮しつつ、4年間一貫した、調和のとれた、かつ、効果的なカリキュラム編成に取り組むための学内の仕組みを整える。

【高等教育の一層の改善について（答申）】（平成9年12月18日 大学審）

- **教養教育は高等教育全体の大きな柱であり、全教員の責任において担うべきものであるとの認識を徹底することが必要。**
- まず第一に**教養教育によって学生にどのような知識あるいは能力を身に付けさせるのか、その目的を明確にすることが必要。**明確な目的意識と適切な方法による教養教育を実施することが必要。また、教養教育は、**従来からの専門学部の教員を含め、全教員が責任を持って担うべきものである**という認識の下、その実施・運営に責任を持つ組織を明確にする（…）。

これについて、文科省はどう言っているか。

【21世紀の大学像と今後の改革方策について（答申）】

（平成10年10月26日 大学審）

教養教育は専門教育と対置されるものではなく、専門教育においても教養教育の理念・目標を踏まえた教育が展開されることが専門教育の充実・強化の上でも一層重要となることを十分に認識しなければならない。

【初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）】

（平成11年12月16日 中教審）

高等教育においては**教養教育を重視**することによって、学生に幅広く深い教養や高い倫理観を醸成するとともに、学生生活全般を通じて豊かな人間性を身に付けさせることが必要。これと併せ、職業倫理の基礎となるべき部分を育成することも必要。

これについて、文科省はどう言っているか。

【新しい時代における教養教育の在り方について（答申）】（平成14年2月21日 中教審）

- **新たに構築される教養教育**は、学生に、グローバル化や科学技術の進展など社会の激しい変化に対応し得る**統合された知の基盤**を与えるものであることが重要。**従来の縦割りの学問分野による知識伝達型の教育や、専門教育への単なる入門教育ではなく、知識や思考法などの知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力の涵養**など、新しい時代に求められる教養教育の制度設計に全力で取り組むことが必要。
- 教養教育の改善充実に先導的に取り組み、他の大学の模範となる国公立大学に対し、「**教養教育重点大学（仮称）**」として思い切った重点的支援を行う仕組みの導入されることに期待。

【我が国の高等教育の将来像（答申）】（平成17年1月28日 中教審）

新たに構築されるべき「教養教育」は、学生に、国際化や科学技術の進展等社会の激しい変化に対応し得る**統合された知の基盤**を与えるものでなければならない。各大学は、**理系・文系、人文・社会・自然**といった、**かつての一般教育のような従来の縦割りの学問分野による知識伝達型の教育や単なる入門教育ではなく、専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考法等の知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力の涵養**に努めることが期待される。

これについて、日本学術会議はどう言っているか。

【日本学術会議「提言：21世紀の教養と教養教育」

(日本の展望委員会／知の創造分科会)】 (平成22年(2010年)4月5日)

p.19

- 教養の形成とその形成を主目的とする教養教育は、**一般教育に限定されるものでなく、専門教育も含めて、四年間の大学教育を通じて、さらには大学院での教育も含めて行われるもの**であり、**一般教育・専門教育の両方を含めて総合的に充実を図っていくことが重要**である。
- **一般教育は、教養教育の中核的な部分として、学生がどの専門分野を専攻することになるか／専攻しているかに関わりなく、すべての学生が共通に学修する「共通基礎教養(CC)」として位置づけられる**と同時に、一定の広がり^と総合性を持つものであることが重要である。

pp.19

- **一般教育**は、教養の形成を主目的とする教養教育を直接的に担うべく位置づけられるものであるが、同時に、**専門教育の導入・基礎としての役割をある程度担うもの**でもある。それに対して、**専門教育**は、学問的・職業的な専門知識の教授(伝達)とその専門的な素養・能力の形成を系統的に行うものであるが、同時に、特に学士課程においては、それは**教養教育の一翼を担う「専門教養教育」**として行われることも重要である。

ジェネリック・スキル（汎用的技能）

近年、教育学や教育政策において出現したトピック

= 「新しい能力」論

→ 21世紀型スキル／コンピテンシー／リテラシー

汎用的技能

(generic skills／transferrable skills)

汎用的スキルとは？

汎用的スキル



ギリシャ語 (pan)

全
総

(all)

(universal)

いつでもどこでも使えるスキル

every time and every where

学んだことを**他の場面で**
応用・発揮できる！

ジェネリック・スキルについて

◎日本学術会議「回答：大学教育の分野別質保証の在り方について」平成22年（2010年）

「分野に固有の知識や理解に依存せず、一般的・汎用的な有用性を持つ何かを行うことができる能力」

◎中央教育審議会「答申：学士課程教育の構築に向けて」平成20年（2008年）12月24日

pp.12 「知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能」

（1）コミュニケーション・スキル

日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる。

（2）数量的スキル

自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる。

（3）情報リテラシー

情報通信技術（ICT）を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。

（4）論理的思考力

情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる。

（5）問題解決力

問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる。

内閣府・・・	「人間力」	} として、それぞれ定式化
(中教審) 文科省・・・	「学士力」	
経産省・・・	「社会人基礎力」	
厚労省・・・	「就職基礎能力」	

「科目区分としての『**専門教育**』も、**いわゆるジェネリックスキルの形成に広範に寄与し得る**ものであり、またコミュニケーション能力の育成など、市民性の涵養に寄与する**教養教育としての機能も担い得る**ものである」 (p.7)

「ジェネリックスキル：**分野に固有の知的訓練を通じて獲得することが可能**であるが、分野に固有の知識や理解に依存せず、一般的・汎用的な有用性を持つ何かを行うことができる能力」 (p.18)

「こうした知的訓練を通じて、特定の専門分野の中だけでなく、**広く職業生活一般において汎用的に活用することが可能な能力（ジェネリックスキル）が身に付けられるであろうことも、専門分野の教育の重要な機能**であり、**専門分野の学習目標として明確に位置付けられるべき**である。
（中略）専門教育と教養教育との間で、それぞれの特性に応じてどのようなジェネリックスキルの形成を担わせるのかが検討され、相互補完的に教育課程が編成されることが望まれる。**一部に見られるジェネリックスキル＝教養教育というような認識は改められるべき**である」 (p.47)

ジェネリック・スキル

▼深堀（2013）より

「ジェネリック・スキルは**専門分野から独立（脱文脈化）して習得されるわけではない**」

▼坂本（2019）より

「○そもそも、汎用的技能『のみ』を教えることは可能なのか？

→『専門家』である教員が『汎用的』な能力を育成することはなぜ可能なのか？」

「○専門教育の目的：各分野の知識・方法の体系的に理解・習得した上で、その成果を固有の『文法』に従ってアウトプットできる人材の育成

○高等教育で育成する汎用的技能

→汎用的技能の育成自体を目的とするのではなく、専門的知識・技能等の習得の過程において**結果として身につくもの**」

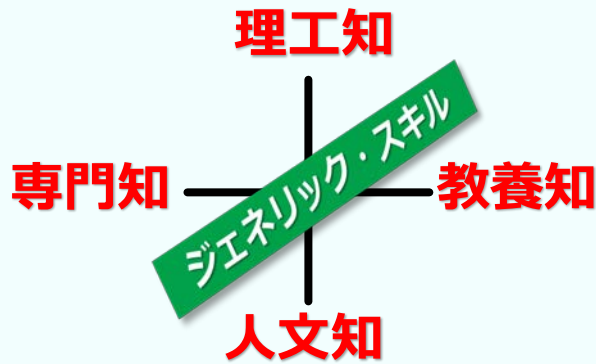
「○汎用的技能の測定可能性ではなく、その**習得の過程の多様性**に目を向けること」

▼河野（2016）より

「ジェネリック・スキルの教育というのは1回で終わるわけじゃなくて、**専門性が進むと同時にジェネリック・スキルも新たにらせん状に開発されていかなきゃいけないのではないのでしょうか**」

「専門」と「一般教育」の関係

再録



専門	一般教養
文学部 哲学科 法学部 医学部	〇〇〇
理工学部	「哲学」、「哲学入門」

※「学問」ではなく「科目」になってしまう。

西欧型の **liberal education**（古典的教養と人格陶冶）から
 アメリカ型の **general education**（汎用的スキルの修得）への
 シフトを通じて、また、
 古い「**教養**」概念から、「**能力**」へのシフトを通じて、
 はじめて明確になった視点。

疑問いろいろ

「専門」と「教養」 ←



専門ではできないことをやる「おまけ」？

この中で教養も培う？

専門の中だけで培えるなら、それが一番よいのかも。しかし、それができていない現実。

⇒専門ではできないジェネリック・スキルを洗い出して、それを補うものとして教養教育を付加させる？

- ◎ 汎用的スキルというものが、専門教育の中で（も）十分に鍛錬されるものであるとする**ならば**（そうである**にもかかわらず**）、なぜ教養教育というものがあるのか。
- ◎ 言い方を変えると、専門教育だけで事足りるとするならば、教養教育の存在意義や使命とは何であるのか。それとも、**専門だけでは、やはり事足らないのか。**
- ◎ 専門教育の足りない分を補うのが教養教育なのか。そうすると、教養教育は、やはり**専門に従属するもの、専門の端女・侍女**ということになるのか。

取り出してみたい論点

1. 教養教育は、専門教育ではできないところ、足りないところを補う「おまけ」のようなものなのか。
2. ジェネリック・スキルは、専門の学修に「付随して」身につけるべきものなのか。むしろ、高等教育や、ひいては人生における学修の最終的な目的とは、それではないのか。
3. 専門教育でも十分にジェネリック・スキルを養うことができると仮定して、教養教育によって培われるものがジェネリック・スキル（のみ）であるならば、それは教養教育の専売特許ではないということになる。その場合、**教養教育に「固有の」任務**というものはあるのか。まがりなりにも、教養教育**「でしか」**涵養できないジェネリック・スキルなるものがあるのかどうか。
4. ジェネリック・スキルは、**単体で（それだけ切り出して）**育成できるものなのか。一つの科目で、ジェネリック・スキル**「のみ」**を教えることは可能なのか。
5. もしも可能だとすれば、誰が教えるのか。大学教員は「専門家」集団であり、専門能力を買われて雇用されている。つまり、ジェネリック・スキル養成のプロではない。「専門家」である大学教員が「汎用的」技能を教えることが可能だと考える根拠は何なのか。

附錄

參考資料集

(John Stuart Mill, 1806年～1873年)

イギリスの哲学者・政治哲学者・教育思想家

「大学は職業訓練の場であってはならない。大学は、生計を得るためのいくつかの特有の手段に人々を適応させるのに必要な知識を授けることを意図していない」

「大学の目的は、熟練した法律家、医師、技術者を養成することではなく、有能で教養ある人間を育成することにある」

Cf. セント・アンドルーズ大学名誉学長就任講演（1867年2月）より

John Stuart Mill: Inaugural Address; Delivered to the University of St. Andrews, Feb. 1st 1867, London: Longmans, Green, Reader, and Dyer, 1867.

※当時のヨーロッパでは、専門職養成のための公的機関（法律学校、医学校、工科大学）は別に設置されていた。つまり、大学ではなかった。

J・S・ミル

「人間は、一般教養教育を受けなくても有能な弁護士になることはできるが、**哲学的な弁護士**、つまり、単に詳細な知識を頭に詰め込んで暗記するのではなく、**物事の原理を追求し把握しようとする**哲学的な弁護士になるためには、一般教養教育が必要となる」

「靴づくりを職業としている人について言えば、その人を**知性あふれた靴職人**にするのは教育であって、靴の製造法の伝達ではない」

Cf. John Stuart Mill: Inaugural Address; Delivered to the University of St. Andrews, Feb. 1st 1867, *ibid.*

三木 清 (みき きよし)

昭和初期（1930年代）の「京都学派」を代表する哲学者

当時、横行していた教養主義を**教養ある俗物**と批判！

「真の教養は単なる博識と区別されることが必要」

「博識は却って屢々**俗物**を作る」

「教養といわれるものは、専門的乃至職業的知識であるよりも、人間を真に人間らしくし、人間性を完成するに必要な普遍的知識」

Cf. 三木清『教養論集』大澤聡／編、講談社文芸文庫

「教養」とは？

自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のためになにができるかを知っている状態、あるいはそれを知ろうと努力している状況

cf. 阿部謹也『「教養」とは何か』講談社現代新書、1997年、p.56

生活様式が変化していく中で、どれを受け入れて、どれを諦めるか。そうした自分の中の基準、「何でもあり」にしないための枠組みをきちんと持つための助け

cf. 科学史家・村上陽一郎が考えるコロナ時代の教養
「『知らない、何でもあり』の状態は恐ろしい」
文春オンライン

<https://bunshun.jp/articles/-/39004?page=4>

公共圏における話し合いに参加して、よりよい解決策をみんなで考え出したり、より望ましい社会のあり方を決めるのに必要な素養・能力

cf. 戸田山和久『教養の書』筑摩書房、2020年、p.113

「教養」とは？

福田恒存でしたか、世の中には学歴、つまり**教育と関係のない教養**もあると言っています。彼が地方で汽車に来ったとき、別の席に坐っていた土地の老婦人が「窓を開けてもよろしいか」と福田恒存に尋ねたときのしぐさと言葉遣いが、決していわゆる都会的な意味での高学歴女性のようにではなかったけれど、**人との距離を保った実に品のいい言葉としぐさ**だった。これこそが教養というものだと感じたとき、彼は書いています。**相手の立場に身を置くとか、自分を省みて見る**というような自省的な態度、謙虚さ、日常的でないものにぶつかったときに**応用のきく精神の柔らかさ**が、本当の意味での教養というものなのではないでしょうか。（原文ママ）

cf. 村上陽一郎先生×猪木武徳先生 対談『教養としての「漱石」』（1）
2020年07月09日

<https://www.aspeninstitute.jp/column/detail/20200709-687.html>

「教養」とは？

人間としての教養と言ったときに、私にとって教養という言葉の持っているぎりぎりのものは、**人間としてのモラル**です。教養という言葉が揶揄するときの常套句に「理性と教養が邪魔をして」というのがありますね。でも、慎みを忘れそうになったときに、「理性」と「教養」とが邪魔をしてくれなければ、それは人間じゃない、とさえ言えるのです。

ですから、(…) 通俗的な意味で教養のないと思われる人、たとえば本はあまり読んでないとか、外国語も知らないとかいうような意味で教養がないと言われている人でも、いま私が申し上げたような意味で、人間としてのぎりぎりなところの教養というのを持っている人は、いまでも多分多くいるだろうと思いますし、歴史の中ではいくらでもいたと思うんですね。

cf. 村上陽一郎『あらためて教養とは』新潮文庫、2009年、p.26

「教養」とは？

(…)**教養にはもう一つ、決定的に大きな要素が含まれている、と確信しています。それは、自らを立てることに必要なのが教養だ**と思うのです。

(…)「立てる」と言っても、「人より先にする」という意味ではなく、**「揺るがない自分を造り上げる」という意味**です。あるいは、**自分に対して則(のり)を課し、その則の下で行動できるだけの力をつける**、と言い換えてもいいかもしれません。このことは、身につけた知識の量とは関係がありません。しかも、その則は——というより私は**「規矩(きく)」**という言葉が好きで、(…)その「規矩」は、自分独りに課したものでありながら、やはり自分の生きる社会との関係の中で、自らと社会との協働関係の中で、見出し、自分に課していくべきものです。

cf. 村上陽一郎『あらためて教養とは』新潮文庫、2009年、p.16

現代の教養の一つの重要な意義は、**可能な選択肢をできるだけ多く体験すること、あるいはその機会を提供すること**、そこにあるのだと、私は考えています。

cf. 村上陽一郎『あらためて教養とは』新潮文庫、2009年、p.199

「専門」と「教養」の関係とは？

教養というのは各分野の知識を横断する知識を身につけ、細分化、専門化された現代の世界を調和的に捉えて、様々な分野と交流しながら、共同社会を構築し、運営するような知のあり方を考えます。

したがって、専門のための前のステップではなくて、実を言うと、教養というのは**専門性がいつも立ち返らなさいいけない土壌のようなもの**なのです。

(…) 学問の専門性が進むにしたがって、専門家がいつも意識していなければならないことがあります。それは、**自分の専門性が広い枠組みの中ではいかなる意味を持っているのか、どのような貢献が社会にできるのか、そして最終的に専門を追求する好奇心はそもそもどのような根っこを持っているのか**ということです。これらを知るためには、必ず**共同社会の中で自分の学問の存在を位置づけている必要があります**。教養というのは**そのための知**なのだと思います。

(…) **教養があつて次に専門ではなくて、専門が立ち戻る場所としての教養**、あるいは、**専門と教養の関係を循環的に捉えるべき**なのです。教養教育は(…)単に専門課程に入るための準備や前段階ではないと思っています。(…)

むしろ**教養は、専門知識を専門集団の関心と利害の文脈から、一般社会の関心と利害の文脈に開き直すことを通して、専門性の意味と価値を問い、再検討するフィードバックの役割を担うべき**です。したがって教養には終わりがなく、終わることがない。大学の4年間でも、教養は4年のあいだ、何かの形で接していくべきものであると思います。

cf. 河野哲也「教養教育と初年次教育における哲学の意義」、国立教育政策研究所 高等教育政策セミナー (7) 哲学教育研究会キックオフミーティング兼研究会：高等教育における哲学教育の意義、2016年、pp.6

「専門」と「教養」の関係とは？

教養教育の目的は第一に「**自分自身をマップすること**」にある。それは、図書館のどの書棚にどんな本が配架されているかを示す案内板や、山歩きするときの地図の働きに似ている。案内板が教えてくれるのは、「自分が知っていること」よりはむしろ「自分が知らないこと」である。地図は「自分のいる場所」よりはるかに多くの情報を「自分がいない場所」について伝えてくれる。それが教養教育の本来の姿だと私は思う。

(…)**専門家**というのは他の専門家との協働作業ではじめてその力を発揮する。協働するためには、自分には何ができて、何ができないのか、自分は何を提供できて、何を欠いているのかを言葉にできなければならない。非専門家に自分の専門について手際よく説明することができる人間のことを**専門家**と呼ぶのである。

(…)**専門性**とは自分が「**地図上のどこにいるのか**」を指示できることである。(…)**「地図を見る力」を養うこと、それが教養教育である。**

参考文献 一覽

※本発表で直接言及しなかったものも含め、多くの先行研究から貴重な示唆を得た。
この場を借りて、お礼を申し上げます。

- ・ 愛知教育大学「大学教育におけるジェネリック・スキル」 http://www.aichi-edu.ac.jp/higher-edu/liberal/mt_files/gskill.1.pdf
- ・ 青木育志『教養主義者 河合榮治郎』春風社、2012年
- ・ 赤坂真人「大学における教養教育の意義」、『吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）』第31号、2021年
- ・ 芦田宏直『シラバス論——大学の時代と時間、あるいは〈知識〉の死と再生について』晶文社、2019年
- ・ 阿部謹也『「教養」とは何か』講談社現代新書、1997年
- ・ アラン・ブルーム『アメリカン・マインドの終焉：文化と教育の危機』（新装版）、菅野盾樹 訳、みすず書房、2016年
- ・ 綾井桜子『教養の揺らぎとフランス近代：知の教育をめぐる思想』勁草書房、2017年
- ・ 天野郁夫『大学の誕生〈上〉帝国大学の時代』中公新書、2009年
- ・ 天野郁夫『大学の誕生〈下〉大学への挑戦』中公新書、2009年
- ・ 石井洋二郎、藤垣裕子『大人になるためのリベラルアーツ：思考演習12題』東京大学出版会、2016年
- ・ 石井洋二郎、藤垣裕子『続・大人になるためのリベラルアーツ：思考演習12題』東京大学出版会、2019年
- ・ 石田英敬「『教養崩壊』の時代と大学の未来」、『世界』2002年11月号、岩波書店
- ・ 和泉司「『教養』と『教養主義』—大学におけるその歴史的経緯」、豊橋技術科学大学紀要『雲雀野』第42号、2020年
- ・ 内田樹「教養教育とは何か」、内田樹の研究室、2017 http://blog.tatsuru.com/2017/06/08_1606.html
- ・ 宇野重規『民主主義とは何か』講談社現代新書、2020
- ・ 大口邦雄『リベラル・アーツとは何か：その歴史的系譜』さんこう社、2014年
- ・ 大澤聡『教養主義のリハビリテーション』筑摩書房、2018年
- ・ 黄福涛「アメリカにおけるliberal educationとgeneral educationについて—歴史的な考察および最近の動き」、『広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集』第41集、2010年
- ・ 隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』星海社新書、2018年
- ・ ガート・ビースタ『民主主義を学習する——教育・生涯学習・シティズンシップ』上野正道／藤井佳世／中村（新井）清二 訳、勁草書房、2014年
- ・ ガート・ビースタ『よい教育とはなにか——倫理・政治・民主主義』藤井啓之／玉木博章 訳、白澤社、2016年
- ・ 加藤周一、徐京植、ノーマ・フィールド『教養の再生のために：危機の時代の想像力』影書房、2005年
- ・ 荻部直『移りゆく「教養」』NTT出版、2007年
- ・ 荻谷剛彦、石澤麻子『教え学ぶ技術』ちくま新書、2019年

- ・ 河合栄治郎『学生に与う』（改訂版）呉PASS出版、2016年
- ・ 北村三子「近代青年と教養——教養主義を超えて」、『教育学研究』第66巻3号、1999年
- ・ 絹川正吉「研究大学における教養教育」、『名古屋高等教育研究』第6号、2006年
- ・ 教養教育研究会報告書『教養教育グランド・デザイン——新たな知の創造——：高等教育における教養教育モデル』（文部科学省委託研究）慶應義塾大学出版会、2002年
- ・ 楠見孝・服部弘・一色伸夫「第84回公開シンポジウム：批判的思考力を身につける・育む」、『子ども学』第15号、甲南女子大学 国際子ども学研究センター、2013年
- ・ 楠見孝「良き市民のための批判的思考」、『心理学ワールド』61号（特集：批判的思考と心理学）、日本心理学会編、2013年
- ・ 久保田祐歌「大学におけるジェネリック・スキル教育の意義と課題」、『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』第3号、2013年
- ・ クリストフ・シャルル、ジャック・ヴェルジェ『大学の歴史』岡山茂／谷口清彦 訳、白水社（文庫クセジュ）、2009年
- ・ 慶応義塾大学教養研究センター 編『「教養」を考える：現代を読みとくために』慶応義塾大学教養研究センター、2003年
- ・ 経済産業省「人生100年時代の社会人基礎力について」、平成30年2月
- ・ 河野哲也「教養教育と初年次教育における哲学の意義」、国立教育政策研究所 高等教育政策セミナー（7）哲学教育研究会キックオフミーティング兼研究会：高等教育における哲学教育の意義、2016年、於：霞山会館
- ・ 小玉重夫『学力幻想』ちくま新書、2013年
- ・ 後藤邦夫「『教養教育』の再定義とカリキュラムの設計、運営、評価」、『大学教育』（大阪市立大学）第8巻、第1号、2010年
- ・ 五神真『大学の未来地図』ちくま新書、2019年
- ・ 佐伯胖、藤田英典、佐藤学（編集）『学びへの誘い』東京大学出版会、1995年
- ・ 坂本尚志「薬学教育においてどのような哲学・倫理教育が必要か？」、国立教育政策研究所 高等教育政策セミナー（14）学位プログラムと哲学教育のカリキュラム、2018年、於：京都大学
- ・ 坂本尚志「汎用的な能力を養成するために専門教育は不要なのか」、大学教育研究フォーラム（京都大学高等教育研究開発推進センター）第25回シンポジウム・特別講演・パネルディスカッション、2019年3月24日
- ・ 佐藤郁哉（編著）『50年目の「大学解体」 20年後の大学再生——高等教育政策をめぐる知の貧困を越えて』京都大学学術出版会、2018年
- ・ 佐藤優『知の教室——教養は最強の武器である』文春文庫、2015年
- ・ 柴田翔「全入時代の大学と＜教養＞の再定義—人文系学部の再生のために—」、『学術の動向』第6巻第7号（2001年7月号）、公益財団法人 日本学術協力財団、2001年
- ・ 高田里恵子『文学部をめぐる病い——教養主義・ナチス・旧制高校』松籟社、2001年
- ・ 高田里恵子『グロテスクな教養』ちくま新書、2005年
- ・ 高橋輝暁 編『人間形成としての教養——ハンガリー、フィンランド、日本におけるドイツ的理念の受容と将来展望』春風社、2018年

- 竹内洋『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』中公新書、2003年
- 田中文憲「日本的教養（1）～教養主義をめぐる～」、『奈良大学紀要』第42号、2014年
- 田村栄子『若き教養市民層とナチズム——ドイツ青年・学生運動の思想の社会史』名古屋大学出版会、1996年
- C・H・ハスキンス『大学の起源』青木靖三／三浦常司 訳、八坂書房、2009年
- 中央教育審議会「答申：学士課程教育の構築に向けて」平成20年（2008年）12月24日
- 筒井清忠『日本型「教養」の運命——歴史社会学的考察』岩波現代文庫、2009年
- 筒井清忠（編）『大正史講義【文化篇】』ちくま新書、2021年
- 東京工科大学「教養教育の指針 2014」 https://www.teu.ac.jp/ap_page/koukai/4_002.pdf
- 東谷護『表現と教養——スキル重視ではない初年次教育の探求』ナカニシヤ出版、2019年
- 東谷護（編著）『教養教育再考——これからの教養について語る五つの講義』ナカニシヤ出版、2019年
- 戸田山和久『教養の書』筑摩書房、2020年
- トム・ニコルズ『専門知は、もういらぬのか——無知礼賛と民主主義』高里ひろ 訳、みすず書房、2019年
- 仲正昌樹『教養主義復権論：本屋さんの学校2』明月堂書店、2009年
- 中村高康『暴走する能力主義』ちくま新書、2018年
- 日本学術会議「提言：21世紀の教養と教養教育」（日本の展望委員会／知の創造分科会）平成22年（2010年）4月5日
- 日本経済団体連合会「今後の教育改革に関する基本的考え方—第3期教育振興基本計画の策定に向けて—」、2016年
- 野田宣雄『ドイツ教養市民層の歴史』講談社学術文庫、1997年
- 野田宣雄『教養市民層からナチズムへ——比較宗教社会史のこころみ』名古屋大学出版会、1988年
- 羽田貴史「大学における教養教育の過去・現在・未来」、『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第2巻、2016年
- 林哲介『教養教育の再生』ナカニシヤ出版、2017年
- H・コリンズ、R・エヴァンズ 著『専門知を再考する』奥田太郎 監訳、和田慈／清水右郷 訳、名古屋大学出版会、2020年
- 日比嘉高「『大学教養』で何を学ぶのか」、『名城大学教育年報』第13号、2019年
- 深堀聡子「なぜジェネリックスキルを測定するのか／大学にとってそれはどのような意味をもつのか」、CRET/BERD国際シンポジウム「これからの社会で求められる人材、能力とその力の測定とは」～国際アセスメントの能力観を通して考える～、2013年2月4日、於：東京国際フォーラム
- 福田博子「大学における教養教育についての考察」、『八洲学園大学紀要』第6号、2010年
- 福留東土・戸村理・蝶慎一 編『教養教育の日米比較研究』（高等教育研究叢書158）広島大学高等教育研究開発センター、2021年

- 福間良明『「働く青年」と教養の戦後史——「人生雑誌」と読者のゆくえ』筑摩書房、2017年
- 福間良明『「勤労青年」の教養文化史』岩波新書、2020年
- 藤原正彦『国家と教養』新潮新書、2018年
- 本田由紀『教育は何を評価してきたのか』岩波新書、2020年
- 松岡亮二『教育格差』ちくま新書、2019
- 松下佳代（編著）『〈新しい能力〉は教育を変えるか：学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房、2010年
- 松下佳代「〈センター教員・共同研究論考〉汎用的能力を再考する——汎用性の4つのタイプとミネルヴァ・モデル——」、『京都大学高等教育研究』第25号、京都大学高等教育研究開発推進センター、2019年
- 松尾知明『21世紀型スキルとは何か——コンピテンシーに基づく教育改革の国際比較——』明石書店、2015年
- 三木清『教養論集』、大澤聡 編、講談社文芸文庫、2017年
- 水野義之「現代社会学部公開講座：日本の大学に『教養』を取り戻そう：大学教養教育の現状と課題を考える」、京都女子大学紀要『現代社会研究』第20号、2018年
- 村上陽一郎『やりなおし教養講座』NTT出版、2004年
- 村上陽一郎『あらためて教養とは』新潮文庫、2009年
- 村上陽一郎『文化としての科学／技術』岩波現代文庫、2021年
- 村上陽一郎『エリートと教養——ポストコロナの日本考』中公新書ラクレ、2022年
- 山泉進「〈教養〉を読む」、明治大学大学院教養デザイン研究科紀要『いすみあ』第4巻、2012年
- 山崎正和『文明としての教育』新潮新書、2007
- 山田剛史・森朋子「学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割」、『日本教育工学会論文誌』34(1)、2010年
- 山本義彦「教養概念と『教養教育』を考える」、『静岡大学教育研究』第4号、2008年
- 山脇直司（編）『教養教育と統合知』東京大学出版会、2018年
- 芳沢光雄『リベラルアーツの学び——理系的思考のすすめ』岩波ジュニア新書、2018年
- 吉田文『大学と教養教育——戦後日本における模索』岩波書店、2013年
- 吉見俊哉『大学とは何か』岩波新書、2011年
- 渡辺かよ子「『修養』と『教養』の分離と連関に関する考察——1930年代の教養論の分析を中心に——」、『教育学研究』第66巻3号、1999年
- 渡邊浩一「教養課程と教職課程の観点から」、国立教育政策研究所 高等教育政策セミナー（14）学位プログラムと哲学教育のカリキュラム、2018年、於：京都大学
- John Stuart Mill: Inaugural Address; Delivered to the University of St. Andrews, Feb. 1st 1867, London: Longmans, Green, Reader, and Dyer, 1867.